

朝鮮から見た倭城

村井章介

一 「倭城」とは

一六世紀末の東アジアをゆるがした豊臣秀吉の朝鮮出兵の過程で、日本軍は朝鮮の各地に城郭を築いた。これを「倭城」という。倭城は、築造場所、戦略的意味、様式・構造などの観点から、対照的な二つのカテゴリーに分けられる。

第一は、開戦当初の目標に即して、①明に攻めこむ際の補給路を確保するため、②秀吉自身が出馬した際の「御座所」とするため、釜山―漢城（ソウル）―平壤間に一日行程ごとの配置が計画された。恒常的な使用に重点をおくものではなく、朝鮮側の城に手を加えた場合も多かったと思われる、一部は実際に築造されたが、明瞭な遺址はほとんど確認されていない。

第二は、明進攻の野望が挫折し、戦略目標が朝鮮半島南部の確保に変化した段階で、①朝鮮側の（とくに水上からの）攻撃に対する防衛、②地域支配の拠点形成を目的に、主として慶尙南道の海岸部

に密度濃く築造された。日本式の築城技術を駆使した本格的な城郭で、戦争終了後近年まで手つかずで放置されたために、遺構の残りはきわめて良好である。

倭城の研究は近年とみにさかんである。容易になった現地調査と、日本側史料の探索・読解に基づいて、主として城郭史の観点から、研究が蓄積され、中野等『豊臣政権の対外侵略と太閤検地』（校倉書房、一九九九年）、笠谷和比古・黒田慶一『秀吉の野望と誤算―文祿・慶長の役と関ヶ原合戦―』（文英堂、二〇〇〇年）・白峰旬『豊臣の城、徳川の城』（校倉書房、二〇〇三年）等の研究書が、あいついで刊行された。

この隆盛のなかでとり残された感があるのが、朝鮮側史料の活用である。『朝鮮王朝実録』『壬辰状草』などに豊富な史料があるのに、それを有効に使った研究は寥寥たるものである。ようやく最近、福島克彦「都市」を指向した倭城（『倭城の研究』三号、一九九九年）や太田秀春『朝鮮の役と日朝城郭史の研究―異文化の遭遇・受

容・変容』(清文堂出版、二〇〇五年)が、朝鮮側史料を多く用いて、倭城と朝鮮民衆との接触の姿を論じた。

朝鮮側史料を活用する意味は、情報の増加だけではない。日本側史料だけに基づく研究は、いかに精細を極めたとしても、攻めこんだ側の論理にひきずられた歴史像を結んでしまうことにならないか。侵略を受けた側の史料を用いることで、対象に注ぐ視線が複雑化され、より公平な視点から戦争の真実に迫りうるだろう。

そこで本稿では、上記の第二カテゴリーのうち、第一次戦争(文禄の役)およびその後の講和交渉期に築かれた、いわゆる「文禄の城」にしばって、朝鮮側の倭城観察の代表例を二つ、紹介してみた。

二 水軍将李舜臣の敵情探索

緒戦の快速撃にもかかわらず、日本軍が早期に退勢に転じ、開戦から一年後の一五九三年四月にはソウル撤退を余儀なくされた原因は、明軍の参戦、義兵の蜂起とならんで、制海権をほとんど握れなかったことにあった。同年六月、慶尚南道の要衝晋州城を陥落させた日本軍は、朝鮮半島南部を領土として確保するという、戦略目標の転換にともなって、慶尚道沿海部一帯に城郭群の建設を始めた。築城にあたっては、朝鮮水軍の攻撃に備えるべく、海や主要河川に臨み、水上交通路を扼する地点が多く選ばれた。

朝鮮水軍の指揮官として数々の武功をあげた李舜臣は、前線から中央政府にあてて、ひんばんに捷報を中心とする戦況報告を送った。それらは、『壬辰状草』にまとめられ、また『李忠武公全書』にも

収められている。前者のテキストでは、吏説リセツを多用した口語文で、日本軍の状況が生々しく綴られている。上記した倭城の立地から、倭城についても大きな関心が向けられており、絶好の倭城観察記録ともなっている。

それらのなから、一五九三年八月、かれが全羅左水使から同職兼忠清・全羅・慶尚三道水軍統制使に抜擢され、全水軍の総指揮官となった直後に書かれた「陳倭情状」を読みみよう(『壬辰状草』卷三四・『李忠武公全書』卷三)。(内は『全書』の表記)。

李舜臣の命を受けて金海・熊川などの倭軍を哨探した軍官金仲胤・李珍らが、八月十四日に帰宮して、つぎのように報告した。

八月九日に熊川古邑の神堂で一夜を過ごし、翌十日に熊川倭城を眺望したところ、熊川邑の城内や南門外に屯していた賊は、半ばが熊浦に移動して陣地を構えていました。西門外・北門外・郷校洞・東門外に屯する賊は、数はわかりませんが今のところ動きはありません。船隻は大・中・小の船あわせて二〇〇余艘が、熊浦の左右に別れて停泊しています。安骨浦倭城では、城の内外に倭賊が満ちており、家作のまっ最中です。船隻は、船滄(ドック)の左右辺に大・小の船が数知れず列泊しています。院浦から大瓮峙までは新造の家が群集しており、船隻は大・中船あわせて八〇余艘が停泊しています。齋浦では、夜味(野尾)山盗直項(刀直嶺)に遮られて、造られた陣地の多寡は観望できません。同浦の船滄の南方海上には、大・中船あわせて七〇余艘が停泊しています。同浦の沙火郎(花廊)望峰下西辺中峯で城を築いています。永登浦では、貫革基から竹田浦

まで家を建設中で、船隻は船滄から加多里まで数しれず列泊しています。金海の川筋から加徳島前方の海を経て熊川・巨済に至るまで、往来する船隻がつながって絶えることがありません。観望のあと、金海の地内仏毛山に至って一夜を過ごし、翌日上長山の高みに登って見晴るかすと、金海にいる賊は遠い上に暗くて、詳しく知ることはできませんでした。同府から七里ほどにある竹島で家作しており、船隻はその南辺に列泊しています。仏巖滄に屯する賊も陣地を造っていますが、その数は詳しくはわかりません。船隻は同巖下の左辺から五里ほどの間に列泊しています。徳津橋に屯する賊は、伏兵によって四〇余か所の陣地を造っており、船隻は二〇余隻ほどで、橋の下に往来列泊しています。

偵察の活動が倭城に肉薄しているようすがよくわかる。倭軍の駐屯場所やその移動、城内外の工事のようすなども、よく把握されているが、とくに重視されたのが船隻の大きさ・数とその配置であった。どの場所についても船隻の情報はもれなく記されている。ドックの存在も興味深い。金海や徳津橋（徳橋＝農所倭城）など、河口から奥深い地点までいたる船の往来についても、的確に把握されている。細かい地名や山名は未詳で、今後の研究が必要である。

つぎに、倭軍に捕らえられて逃げ帰った固城の水軍兵陳新貴の供述。

八月八日、倭船三隻が私の家の前に着き、兄進輝と一所に捕まりました。永登浦に到着したところ、貫草基、船滄辺、北峯下の三か所で家作がなされており、その数は二〇〇余の多きに至

ります。また北峯で木を伐採して削平し、土城が築かれています。周囲ははなはだ広く、中ではちょうど家作の最中でしたが、国人が倭人の三分の一ほど交じり、使役されていました。その国から兵糧や冬を過ごす衣服などを船に載せて、二三日おきに次々と運んできました。同浦には常時船隻が出入りしており、その時は五〇艘余が停泊中で、帯のように繋がっていました。長門浦・松珍（津）浦などの所でも、峯の頂部を削平して土城を築き、城内に家を造っていました。船隻は大・中船が併せてあるいは一〇〇余隻、あるいは七〇余隻、岸下に列泊しています。熊浦の西峯、齋浦の北山、安骨浦の西峯などの所にも土城を築き、城内に家を造っています。停泊の船隻は岸に遮られて見ることができませんでした。齋浦の船滄には、大・中の船が無数に列泊しています。その他、本土（日本か）から加徳・熊川・巨済に向かう船が、絶え間なく連続しています。私に関しては、倭人らはただ木こりや水汲みに使役するだけでした。そうして八月十九日の夜、隙に乗じて逃亡しました。

倭軍の捕虜となっていた者の証言だけに、城内の状況が具体的に語られている。とくに、巨済島の三倭城（永登浦・長門浦・松真浦）とその周辺で大規模な家作工事が行われており、多数の朝鮮人が使役されていたことや、熊川倭城の近辺に複数の端城が築かれていたこと、日本から兵糧や衣服を運ぶ船が、巨済島・加徳島・熊川などに間断なく出入りしていたこと、などは注目される情報である。この供述について、李舜臣はつぎのようなコメントを加えている。

熊川の三か所、巨済島の三か所で築城・家作中との言は、捕虜

になって逃げ帰った奉事諸万春の供述とほぼ符合しています。本土から兵糧や衣服を次々と搬入している件は、迷劣の人の言で全部に信を措きたいとはいえ、賊の状況を観察すると、明らかに冬を越す意図が見えます。痛腕に堪えません。

三 倭城の破却と査察

第二の事例は一九五五年一〇月のものである。年頭に小西行長が明側のエージェント沈惟敬との間で日明講和三か条をまとめ、明は秀吉を「日本国王」に冊封することに決した。三か条には日本軍の完全撤退という一項が入っていたが、それは秀吉には知らされなかった。秀吉の対応は、一五か所のおもな倭城のうち一〇か所を破却するというもので、残った釜山に近い倭城では、むしろ兵力が増強されていた。

一方、明の冊封使李宗城らは四月末にソウルに至り、九月初めに出發して、二月一日に釜山の日本軍営に入っている。朝鮮側にとって、みずからの頭ごしに進められている講和のなりゆきを見定めるためにも、倭城破却状況の把握は緊要の課題だった。

一〇月二三日より、朝鮮の訓練主簿金景祥が、冊封使に同行予定の朝鮮使黄慎とともに、各所の倭城や日本軍駐屯地のようすを「探審」した。一月二日にソウルに届いた報告に、一〇数か所の倭城の状況が詳細に記されている（『朝鮮王朝実録』宣祖二十八年一月庚午条。その内容は、『東洋史研究』六六卷二号（二〇〇七年）に載せた小稿「朝鮮史料から見た「倭城」」にくわしく述べたので、ここでは簡潔に要約するに留める。

最初に訪れたのは、龍塘すなわち洛東江の本流左岸にある龜浦城である。ここは小早川隆景や立花宗茂が在番した本城だが、廃城となって朝鮮人が農耕を営んでいた。ただし、城域の北辺にある家に小西行長の部下三人が七、八人ずつの倭人を率いて駐在し、出萃米を取り立てていた。城域外の北辺にも倭家が六軒あり、朝鮮人が入りこんでいた。

洛東江の分流に面する金海竹島城には、七、八千の兵がおり、外側を土城、内側を石垣が廻り、城主鍋島直茂が居住する三層の天守閣がそびえていた。船数は一〇〇余艘を数えた。城の北に金海府（府中）と徳橋の二端城があり、「金海三營」を形成していた。金海府では、詰めていた兵は竹島に合流し、収税吏だけが二、三〇〇人留まっていた。城内に官客舎があり、石垣を築いて「將帥」が駐在し、外では朝鮮人と倭賊が混住していて、朝鮮人の家は六〇〇余戸に至る。徳橋城は破却・焼失していた。

ついで洛東江を下って海中に出、まず安骨浦城を見た。もといた倭兵はすべて帰国し、林浪浦から毛利（森）氏が移駐して、城柵や建物を修理していた。四人の小將が各四、五〇〇人の兵を指揮していた。ついで加徳島へ渡る。もといた倭兵はすべて帰国し、巨濟島の永登浦にいた島津義弘が、二千余名の兵を率いて移駐していた。

（別の史料によれば、義弘の子忠恒は九、一〇月ごろに加徳島であらたに城普請を始めている。）朝鮮人の家百余戸が城に接して居を構えており、城下に繋留された船の数は六〇余隻であった。さらに巨濟島へ渡ると、三宮すべてが破却・焼失していた。また海を渡って熊川に至れば、熊浦（熊川城か）・森浦（明洞城か）の両城も破

却・焼失していた。

さらに西行して釜山に至ると、もといた倭兵は撤退を終え、跡に小西行長が熊川城から移駐していた。行長配下の六人の下将は、ひとりあたり数千の兵と千余人の砲手・剣手を率いていたので、総兵力は三万を超えるだろう。城下の船も六八〇余艘の多きを数える。周囲六く七里の新城とは、湊を望む小丘陵にある子城台倭城のことだろう。城内に市場があり、倭人と朝鮮人が入り交じって日々物資を交易している。城域の北辺にあたる東平から凡川にいたる一带には、朝鮮人三〇〇余戸が居住している。佐子川の近くには一〇〇余戸のアワビ採りが住む村がある。子城台西方の山上にある本城には、石垣が築かれ、上に三層の天守閣が乗る。兵器を蓄蔵しているからという理由で、本城への人の出入りは禁止されていた。

釜山の北に隣接する東萊では、もといた倭兵はすべて帰国し、跡に宗義智が森浦（明洞城か）から兵五〇〇余名を率いて移駐した。義智は有力家臣の柳川調信やまなぶといったんは合流したが、調信は到来した冊封使を接待するために、一〇月二五日に帰国したという。城の内外に朝鮮人三〇〇余戸が居住していた。

報告の末尾にある西生浦・林浪浦・機張三城の記事は、西生浦から機張に移駐した加藤清正が、城への出入りを禁じていたので、「探番」ができて伝聞によっている。清正は、行長がまとめた講和自体に反対しており、撤兵に反対する抵抗勢力の中心だった。西生浦の兵は機張に、林浪浦の兵は安骨浦に移ったが、まだ西生浦に五く六〇〇名、林浪浦に四〇〇名が留まっているとのことであった。そこで一月一〇日、黄慎の命により、梁山の役人崔沂が、商人

の身なりで三城に潜入し、状況を探索してこう復命した（『朝鮮王朝実録』宣祖二十八年二月辛丑条）。

清正の移駐した機張では、城普請の最中で、梟邑の城壁から抜いた石と近所で採れる石を運びこんで、石垣を積んでいた。城内では以前建物がまばらだった場所に、どんどん造築していた。西生浦城では、城内の城柵・望楼は全部毀され、住屋も撤去されて、大きな建物が三つ、小さなのが六つ残るだけだった。城柵（土堀か）を撤去した跡にあらたに木柵が設置されていた。城内に残る倭人は五く六〇人にすぎなかった。倭人に聞いてみると、三〇余名が狩に出ているという。林浪浦では、破却の状況は西生浦と同様で、残る建物は一三棟、うち三か所にだけ倭人がおり、残りは無人で戸は開け放しだった。倭人には田野に出ている者もあり、残留数は二千余名とといった見当である。